



自分らしい生き方を探す場所

森

森と共に生きる未来をつくる

山に登り、川で泳ぎ、雪山を滑り降りる。森で遊びながら余暇を過ごすことで、私たちはその大切さを知り、豊かな森がいつまでも続くようにと願います。そして森林を守り育てるために、人と自然が共存する森づくりを実践する人たちがいます。チェーンソーで木を伐る人、森林の計画を立てる人、樹木の健康を管理する人など。自然の中で過ごす時間が好きな人は、私たちと一緒に、豊かな自然と共にある未来について考えていきませんか？

兵庫県立森林大学校

2017年(平成29年)4月、兵庫県宍粟市内に開校。次代の林業を担う人材の養成を行うとともに、森林に関わる人材を幅広く育成するため、森林、林業や木材に関する専門知識や技術等を学ぶ関西唯一の専修学校。これまでに102人が本校を卒業し、社会で活躍しています。

所在地：兵庫県宍粟市一宮町能倉772-1



森



自然のそばで生きるとは



次の世代へ豊かさを手渡す

日本列島の約7割を占める森林は、山の風景を形づくるだけでなく、清らかな水を生みだし、大地を守る「自然環境の川上」としての役割を担っている。その水はやがて田畑を潤し、地中や河川を伝って海に注ぎ、沿岸の漁場へとつながっていく。森・川・海の循環の中で、人は暮らしを築いてきた。

そう考えると、林業は単に木を育てて伐るだけの営みではない。森の手入れを通じて水を育み、土砂を防ぎ、生態系を守る、社会のインフラの一端を担う仕事なのだ。農業や漁業と同様に、次の世代へ環境と地域の豊かさを手渡す、大切な基盤のひとつだ。

兵庫県の中央部に位置する多可町(たかちょう)もまた、そうした自然の循環の中にある。三方を山に囲まれ、町のすぐそばまで森が迫り、歩けば山があり、水が湧く。人の暮らした山が地続きでつながっている。その多可町にある北はりま森林組合は、山林の整備や木材の生産、森林所有者へのサポートなど、地域に根ざした林業の担い手として活動している。

今回は、森林大学校を卒業し現場で汗を流す中屋敷仁さんに話を聞いた。北播磨の山の中で、経験と覚悟が交差する。

自分に嘘はつきたくない

神戸市北区で育った中屋敷さんにとって、山は幼いころから身近な存在だった。山遊びが日常にあり、「自然とともに生きる仕事」をしたいという思いが、漠然と心の中にあっただという。

「父が電気工事の仕事をしていて、手に職をつける生き方には憧れがありました。自分の場合は、それが山で働くことにつながったんだと思います。」森林大学校では、チェーンソーの扱いや伐倒の判断、安全管理といった命に関わる基礎を徹底的に学んだ。卒業後は、在学中にインターンシップで訪れた北はりま森林組合に就職。人間関係の風通しのよさと、最新技術の導入に前向きな職場環境が決め手だった。

「働きはじめて3年目ですが、最初に感じた印象は今も変わりません。先輩方とちゃんと意見を交わして、精神的にもすごく楽に働きやすいんです。」現場では、作業を任される場面も増えてきた。周囲からも「何をやっても真面目で、安心して任せられる」と信頼を集める。

「今の目標は、現場の流れをしっかり掴んで、何でも任せてもらえる存在になることです」

林業の仕事は、自然が相手だけに思い通りにいかない場面も多い。それでも、「ここで働く決めた自分に嘘はつきたくない」と語るその言葉には、揺るがない覚悟が宿っている。

最後に、中屋敷さんに「林業をどんな人に薦めたいか」を尋ねた。「何かを探している人、自分のやりたいことがまだ見つからない人にこそ薦めたいです。ここでの仕事を通じて、きっと何かが見えてくると思う。空気や景色も本当に気持ちよくて、自然に近い環境で働きたい方には、ぴったりです」

すべての卒業後の進路紹介 ▶



中屋敷 仁さん

(北はりま森林組合 / 森林大学校卒業生)



森林で学ぶ日々の中で 現役学生たちの声

※2025年度時点



佐藤 汰一さん(2年)

佐藤さんは姫路出身。祖父が営む造園業を手伝いながら育ち、幼い頃から「木を整える」という仕事が身近にあった。「造園屋さんは木をきれいにする散髪屋さんみたいなイメージでした。剪定した枝の形が整っていく様子や、季節ごとに変わる庭の景色を見るのが楽しかったんです。」大学の演習林で初めて自分の手で木を伐ったときの感覚は、今も鮮明に残っている。「自分で倒す方向を決めて、その通りに木が倒れたときはできたって感じがしました。整備の終わった山をドローンで見たら光が入っていて、ああ、自分たちの手で変えたんだなって思いました。」森林大学校に進学してからは庭を整える造園の仕事とは異なり、山全体を相手にする林業のスケールの大きさを実感した。木に向き合うという点では、つながっている部分もあるという。「雰囲気は全然違うんですけど、木の状態を見ながら整えていくところは共通していると思います。日光が入るようにするとか、水が通りやすくするとか、どう育つかを想像して手を入れるところは同じなんです。」将来は宍粟市内の会社に就職し林業の現場で働きたい。自らの手で地域の山を守り、整えていくことが目標だ。



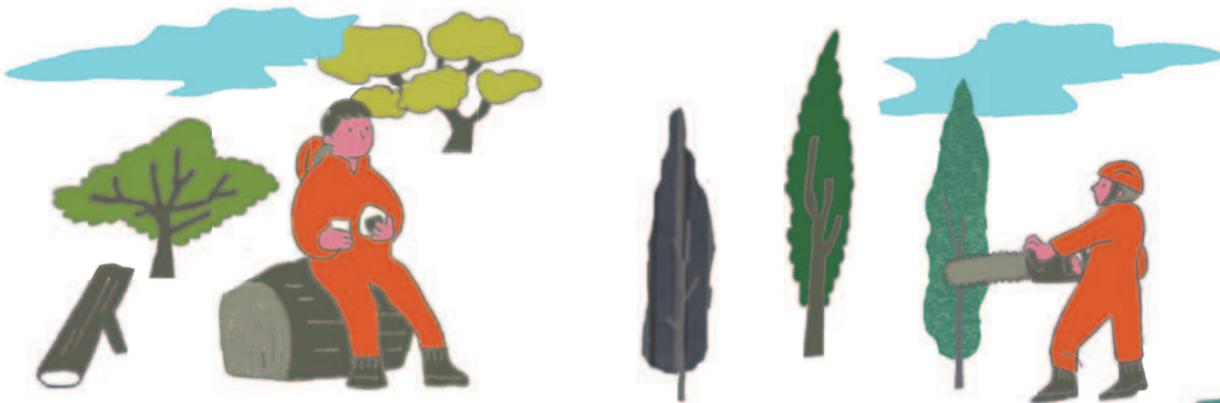
伊達 新さん(2年)

伊達さんは宍粟市の出身。地元の高校を卒業後、森林大学校へ進学した。山に囲まれて育った彼は、人が多い場所より、静かな環境が落ち着くという。「都会の人が多いところはどうしても落ち着かないんです。やっぱり山のほうが自分には合ってるなと思います。」実習を通し、林業のイメージは大きく変わった。「林業って思っていたよりもずっと頭を使う仕事なんです。木をどう伐るか、どう倒すか、周りの安全も考える。自分の成長がそのまま仕事の質につながるんです。」判断ひとつで仲間の安全が左右される。その緊張感も含めて、日々の実習に向き合っている。暮らしの面でも、宍粟の距離の近さが心地よいという。「近所の方がスノボに誘ってくれたり、日頃から声をかけてくれたりするんです。人との距離が近いのが、ここのいいところやなって思います。」将来は地元の市職員として地域に関わりたいたいと考えている。「森林大学校で現場の技術を学んだうえで、公務員として森に関わる道を選ぼうと考えています。現場にも出られる職員として、森と人をつなぐ助けになりたいです。」最後に、この学校を薦めたい人について尋ねると、少し笑ってこう答えた。「自分は感覚派なんで、体で覚えたいタイプの人に向いてると思います。やってみて気づくことが多い仕事なんで。」



大村 素子さん(2年)

41歳の大村素子さんは、森林大学校で学ぶ現役学生。年齢も経歴も、若い同級生たちとは少し異なる。生まれは埼玉。転勤族の家庭に育ち、高校時代に和歌山の山あいの町で過ごした経験が、今も記憶の根っこに残っている。大学卒業後は社交ダンスの選手としても活躍し、その後、大阪から兵庫県佐用町へと夫や子どもたちと移住。自然のそばでの暮らしを求めたこの地で、地域の人々とのあたたかい交流にふれた体験が、「緑を守り、地域に貢献したい」という思いへ変わり、森林大学校への入学にも繋がった。「森林大学校では木の伐り方だけでなく、どういう山を育てていくかを考えさせられます。高齢化が進む地域で、林業をどう継いでいくか。そして、自分に何ができるのか。授業を通して、自身の暮らしや生き方にも向き合っています。」入学当初は、年齢の差に戸惑いもあったという大村さん。けれど、その不安はすぐに消えた。「みんな、いい意味で年齢を気にせず接してくれて。ちょっとぶっきらぼうなんですけど、根は本当に優しいんです。遠慮なくいじってくれたり、普通に話しかけてくれるのがすごく嬉しいです。」年齢の壁を越え、今ではムードメーカーとしてクラスに馴染み、充実した学生生活を送っている。自身の経験も踏まえて、どんな人に森林大学校を薦めたいか尋ねてみた。「自分探しをしている人にこそ薦めたいです。過去の大学生の中には、社会人経験を経て学び直して来ている人も多くいます。2年間という限られた時間ですが、学ぶ内容の密度は濃く、本当に幅広く勉強ができます。」



兵庫県立森林大学校 学生インタビュー

森林に学び、 地域に生きる

すべての学生紹介 ▶



森で働く、森と

私たちの目指す森林の姿

かつて日本の暮らしは、森林とずっと深くつながっていました。家を建てる木材、火のための薪、田畑を育てる落ち葉や、食材としての木の実やキノコなどとして。森林は、私たちの日々の暮らしを静かに強く支える存在だったのです。

しかし戦後の復興と経済成長の中で、木材は輸入が大半となり、燃料や資材は化学製品に置き換わり、私たちは親密だった森林との関係をいつの間にか手放していました。

そうして使われなくなった森は、手入れされず、暗くなり、人間本位の暮らしや経済活動は、森に棲む生き物と私たちの領域をあいまいにしています。

本来、人はひとつの森をいくつかに分けて捉えていました。里山の森では、人々が恵みや楽しみを分かち合う。山腹の森では、木を育て次世代へとつなぐ。山奥の自然に近い森は、生き物の領域として守る、といったように。

いま改めて、様々な環境の要因や課題から、その捉え方が新鮮で、大切なものとして見直されています。人が森林を尊重しながら適切に関わることで、生き生きと蘇り、二酸化炭素を固定する力も強くなります。懐かしいようで新しい関わりがつくる未来の森林。それが私たちがみなさんと目指したい姿です。



働く、だから学ぶ

なぜ私たちは木を伐り、活用していくのか

木は成長の過程で大気中の二酸化炭素を吸収し、木材として幹に炭素を固定します。伐採後は、燃やしても、朽ちても、いずれ再び二酸化炭素として大気に戻りますが、それはもともと大気中に存在していた炭素であり、森林の成長と再生を通じて循環する「自然な炭素循環」の一部です。

一方、化石燃料は長い時間をかけて地中深くに固定されてきた「百万年から数億年前の炭素」です。それを人類が掘り出し、短期間で大量に使ってきたことで、地球全体の炭素バランスは大きく崩れてきました。しかし現時点では、地下資源に依存せずに暮らしていくことは難しいのが事実です。

では、私たちはどう変化すればよいのでしょうか。

地下資源に頼ってきた素材やエネルギーの一部を、できるだけ再生可能な森林資源へと置き換えることです。それは建築物から、小さな道具、薪やペレットに至るまで、幅広く現実的な選択肢があります。

また、身近な森の木を手入れし、活用し、循環させていく地域の取り組みは、森林の二酸化炭素を吸収する力を高め、輸送時に発生する二酸化炭素を削減し、地域の持続可能な経済活動を維持することで、山とまちの関係回復へとつながっていきます。

私たちが地域の森林を適切に整備し、木材を活用しながら「自然の炭素循環」を意識する暮らしへとシフトしていけば、炭素を貯蔵しながら次の森を育てる循環を生み出すことができるのです。

私たちの、小さくとも地に足のついた意識と行動が、未来を静かに支えていきます。木を育てることと同じように、おらかな視座で、私たちは森と共に、50年後、100年後を想い、生きていこう。



企業・一般の方へ

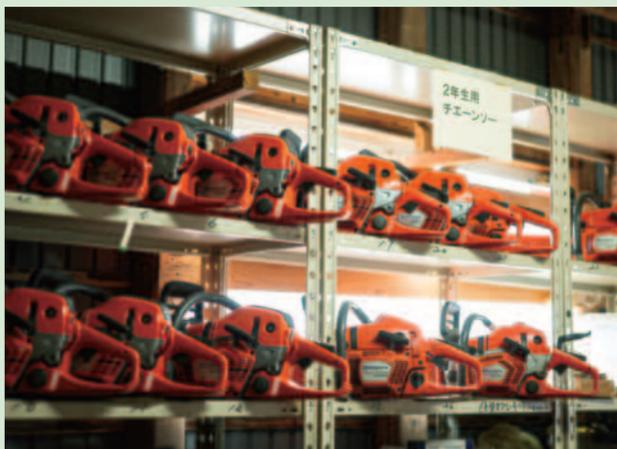
ふるさと納税 「森林の恵み」をフル活用できる森林林業の人材の養成プロジェクト



このプロジェクトを支援いただくと、森林大学校の備品などを購入し、研修内容を充実させることができます。

元小学校を
活用!

学校生活



学校生活 宍粟の学舎で

本校の校舎は旧染河内小学校を改修して活用しており、レトロな雰囲気漂う校内は、訪れる人を懐かしい気持ちにしてくれます。また、玄関や倉庫に整然と並べられた道具からは、自然を相手にする力強さが滲み出ていて、一次産業の学び舎らしさも感じられます。図書室には森林や林業にまつわる書籍が壁一面に収められ、席に着くと窓からは雄大な宍粟の山々を眺めることができます。実習授業の朝は、更衣室で林業用のウェアに着替えて、土が少し残った専用ブーツをもって、スクールバスに乗り込みます。本校から30分ほどバスに揺られると、100haもの広大な演習林に到着。ブーツに履き替え、準備体操を終えた学生たちはスギ林へと足を踏み入れ、教員の指導のもと、チェーンソーで木を伐り、重機を操りながら木を丸太切りにしていきます。バスの中でふざけ合っていた学生たちの少し緊張した面持ちは、林業における安全の大切さをしっかりと学んできた証拠です。こうして学生たちは豊かな自然の中で、森づくりを実践できる術を身に付けていきます。



誰でも
OK!

森がもっと好きになる 大学校の一般向け講座

● 森林セラピー®

● 樹木学講座

● きのこと学講座

● よるの森の生き物観察

● 森を育むジビエ料理



教員の
オススメ

森を知る 本&映画



森ではたらく! 27人の27の仕事

森林に関わる様々な仕事を紹介。ユニークな彼らから見たリアルな森林に触れる一冊。



木のいのち 木のころ

宮大工の名匠が語る、木の個性を読み取り1000年先も残る建物を作る技に込めた想い。



センス・オブ・ワンダー

自然の神秘に驚く感性の尊さを、環境汚染に警鐘を鳴らした『沈黙の春』の著者が綴る。



ニューフォレストスターズ ガイド

林業の実践的な知識を身に付けるなら、まずはこの一冊。林業全般を体系的に解説。



リジェネレーション

気候危機から地球を再生するために、私たちは何ができるのか。地球視点の包括的提言。



WOOD JOB! ~神去なあなあ日常~

林業の現場をリアルに再現?!魅力的な村人と林業を通じて成長していく青春エンタメ映画。

応援!

給付金制度



林業をしたい学生を応援する! 緑の青年就業準備給付金制度

学校を卒業後、森林組合や林業会社などの林業分野に就業する学生の方に、最大142万円/年を給付する制度です。受給するには、卒業後に3年以上は林業分野の会社で勤務することなどの条件を満たす必要があります。

※条件を満たさなかった場合は、全額返還となります。



詳しくはこちら▶



ロゴにこめた思い

なぜリスなのか?リスは食料である木の実を集めては、森のあちこちに隠し保存します。しかし食べきれなかった多種の木の実は、タネとして芽吹き成長するため、リスは森の再生にも役立っています。大学校生には、スギやヒノキの人工林と共に、小さな生命を育む自然林にも注目し、自然と共存する森づくりを実践する存在になってほしい。そんな願いを込めて、木版画で制作しました。



ちょっとのぞいてみよう! 林業のせかい

林業と聞いてどんなイメージが浮かびますか?まずはチェーンソーで大木を伐る勇ましい姿ではないでしょうか。チェーンソーを操り木を伐採するには、様々な知識や技術が必要です。そんな奥深い林業のせかいを、マンガでご紹介。森で働く面白さに触れてみよう!

林業よススメ! チェーンソー編

チェーンソーは、1947年にアメリカで誕生しました。それ以来、林業界必須の道具として進化してきました。

チェーンソーの構造

- 右カッター
- ガイドバー
- チェーン
- スロット
- スロットロッド
- スロットロッドナット
- チェーンブレイク
- チェーンブレイクナット
- チェーンブレイクピン
- チェーンブレイクピンナット
- チェーンブレイクピンナットナット
- チェーンブレイクピンナットナットナット
- チェーンブレイクピンナットナットナットナット
- チェーンブレイクピンナットナットナットナットナット

チェーンソー作業用安全装備

- フェイスシールド
- ヘルメット
- イヤーマフ
- ジャケット
- 防振手袋
- 安全靴

チェーンソーマンの現場道具

- 目立て道具
- アブレーション
- チェーンソー油
- チェーンソーチェーン
- チェーンソーガイドバー
- チェーンソーチェーンナット
- チェーンソーチェーンピン
- チェーンソーチェーンピンナット
- チェーンソーチェーンピンナットナット
- チェーンソーチェーンピンナットナットナット
- チェーンソーチェーンピンナットナットナットナット
- チェーンソーチェーンピンナットナットナットナットナット

チェーンソーの操作

基本動作を徹底することで、事故のない作業を!

エンジン始動

はじめに、チェーンソーを平らな地面に固定し、エンジン始動を行います。

玉切り

切り方は丸木の状況にあわせて色で、玉切りを行います。

最も気をつけたいキックバック

この部分にふれた時に、チェーンソーは右側に反動し、キックバックが発生します。

伐倒

伐倒の準備、根張りの除去、受け口を作る、追い口を作る、くさびを打ち込み倒す。

① 下準備
木を倒す方向を決めます。樹冠や幹の曲がり、木の形状、風向きなどを考えて方向を決めます。

② 根張りの除去
受け口に近い部分を削ります。伐倒方向と平行に根張りを切ります。

③ 受け口を作る
伐倒方向は、受け口の水平面と決めます。

④ 追い口を作る
作業の前に、周囲の作業者に伐倒の知らせを知らせるよう7音を鳴らします。

⑤ くさびを打ち込み倒す
倒れ始めは3m以上は合います。

倒れ終ったら、終了合図の7音を鳴らします。

かかり木処理 禁止事項

新人君、チェーンソー作業で特に気をつける2点も教えてください!

はい!! お願いします。

ひとつめ **キックバック!**
ガイドバーの先端部上側の刃にふれた時にバーがはね上がる。

ひとつ目 **かかり木処理**
伐倒木が別の木にひかかると不安定なまま倒れない。

もし、かかり木になってしまったら、早急に安全な作業方法で処理すること!

かかり木の担ぎ、かかり木を切らずに倒す。

小径木の場合は、木回しやロープなど無理な場合は、けん引機やクレーン等を使って外します。

無理せず、熟練者をお願いするもいわ!

森林大学校って どんなところ？

リアルな自然の中で、森林や林業、木材について学び、森と人が共存できる未来をつくるための知識や技術を身に付けられる、関西唯一の専修学校です。なぜ「林業大学校」ではなく「森林大学校」なのか？それは人間本位ではない「森林との関わり方」があると、私たちは考えているからです。人と自然が共存できる経済活動、そんな林業を目指しています。森林へと目を向ければ、若い木々は炭素を吸収し酸素を生み出しながら成長し、成長した木はいろいろな生き物を育みながら、人の手により様々な用途に活用されています。空中で茂る葉は強い雨を受けとめ、幹を伝わせて根へと届けます。縦横無尽に広がる根は土砂を抱え込みながら、雨水をさらに地中へと導きます。そうして蓄えられた水は暮らしを潤しながら、森林の栄養と共に海へと辿り着き、また雨となって還っていきます。その循環に寄り添い、森林の力を借りながら経済活動を行いつつ、より良い環境を次世代へと手渡す。そのための知識や技術を学ぶことを目的とした学校、それが「森林大学校」です。木を植え、育つまでには長い年月がかかります。いま私たちが手入れするのは、前の世代が植えた木で、私たちが植えた木を伐るのは次の世代です。日々の仕事の中で、過去や未来と向き合いながら、一本一本の木の個性とも向き合っていくので、一つとして同じ作業はありません。決して単純ではなく、深い理解と確かな技術が必要です。私たちが思い描く未来のためには、いろんな技術や資格を持つ人々が助け合う必要があります。チェーンソーで木を伐る人、森林の計画を立てる人、行政として関わる人、森の新たな活用を見つける人、樹木の健康を保つ人など。それぞれが自らの役割を認識し、連携することで、地域経済に貢献しつつ、環境とのバランスが取れた林業を実現できます。森林大学校では、それぞれに合った仕事・役割を見つけられるよう、教員が伴走します。未来の森林を創造する仲間と出会い、自分らしい「森林との関わり方」を一緒に見つけていきましょう。



YouTube @hyogo_shinrindai



▶
みらいへ還る



進路に悩む主人公と、森林大学校に通う兄、ふたりは昔よく遊んだ森へと足を運ぶ。そこで、本来は森が好きだったことを思い出し、生き生きと自分らしさを取り戻していく。そして学びの中で、世代を超えた人と森とのつながりを知り、自らも未来への循環を意識し始める。

▶
僕らの二次産業対談



林業・農業・漁業それぞれの現場から、若者が集まり、魅力や失敗、ビジョンなどをカジュアルに語り合う。三人で出かけたリアルな林業の現場では、想像を上回る作業の様子、森林の雄大さに驚きを隠せない。こうした業種を超えた一次産業の繋がりが、日本の未来をつくっていくはずだ。

ご興味のある方は「オープンキャンパス」や「いつでも個別説明会」へ！

